

自分らしく生きる ハートを熱くする仕事をとおして

JR 東京総合病院産婦人科

鈴木知代

人の命の重み

私はまだ、病院勤務2年目の助産婦です。お産の時には母子の命を守る責任を感じて、今だに心臓がドキドキします。お産の経過は人によって違うので、マニュアル化できない分、自分の判断力が問われるため一層緊張が増します。助産婦学校で学んだ勉強だけでは足りないことが多く、先輩助産婦の知識と経験に富んだ指導・助言によって得たことがたくさんありました。

出産時、女性が正気を失うくらいの激しい陣痛を乗り越える姿や、胎児が狭い産道を通るときに苦しくて児心音が下がっても、母の深呼吸と自分の生命力とで児心音が回復の様子を見てきました。人の命の重みや尊さを感じたり考えざるを得ない状況の中で、助産婦として仕事をする者は“好きである。熱くなれる”という条件を持つ人であるべきではないかと思います。それは、母子の命を預かるという責任と人生における大イベントに関わるという点から言えると思います。

私は、一人ひとりの人間がダイヤモンドのように輝いて生きてほしいと願っていますし、自分も早くそうなりたいと思っています。

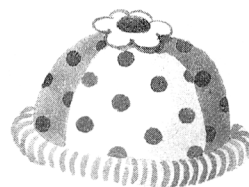
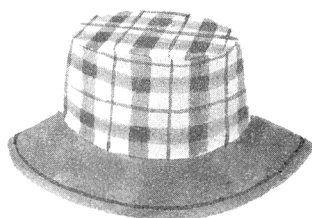
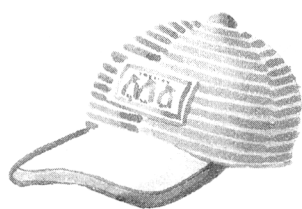
本当の自分

私が助産婦になったのは、自分がなりたいたいという100パーセント純粋な気持ちによるものではありませんでした。そのためか積極的に勉強したり、真剣に取り組めていませんでした。今後も例

え自分の力を出しきろうとしても、結局“好き”ではないと、10の力のうち8しか出せずに終わってしまうと思いました。こんな気持ちで助産に関わるのは失礼であるし、産婦さんやお産に立ち会った家族の人に私の本当の気持ちがわかられてしまうでしょうし、また、外部での学習を受ける意欲がないと、より高いケアの提供ができないと思ってきました。

私は幼い頃から本当は音楽の道に進みたいと思っていましたが、状況に恵まれずどうしても進むことができませんでした。でもどこかで諦めずにいて、仕事のかたわらピアノを続けてました。昨年の11月4日の夜中、私は日記に——やはり音楽をやっていこう——と書きました。そしてその日の夕方に、大好きな祖母が亡くなってしまったのです。その後、私に嵐のような変化が続けざまに起こりました。ジャズ・ポピュラーピアノ指導者の試験に合格し、その時出逢った方にバンドに入らないかとお誘いを受け、現役ジャズピアニストに幸運にも音感の才能を認められ、プロを目指すように進められたのです。

助産婦としてはまだまだ未熟であり、スタッフの方々にはご迷惑をかけ続けた私なので、本来この時期の退職は失礼なのですが、皆様のご理解を得て、私は退職することになりました。お世話になったことに感謝しつつ、これからは、ピアノを中心とした音楽の道で頑張っていきたいと思います。



osaka

音楽と看護職との共通性

当時、音楽の道を断念せざるを得なかった私がなぜ看護の道を選んだのかというと、両者が究極的なところで似ていると考えたからです。それは“人のハートを熱くする”ところです。つまり、人間の精神・身体的パワーをアップする、人が喜んでくれて仕事をするほうも情熱を傾けられて勉強し続けられる点です。実際に看護婦として働いてそう思いましたし、助産婦になってからもそう思ってきました。

しかし、好きであればこそ打ちこめるし、対象との距離も縮まって、より楽しくなると思います。自分自身が幸せであることは大切であると最近とても思います。自分が幸せであれば周りも幸せになって欲しいという気持ちになれるのではないのでしょうか。自分にウソをついたり、幸せと感じないと周りにもどこかで迷惑をかけたり、しわよせを与えてしまうようです。自分らしく生きていくのが大変な今だからこそ、正直な気持ちに向き合えるよう努力していきます。

お産を楽しくするには

看護学生が母性実習で分娩室に来た時、「関わる助産婦さんでお産の雰囲気が全く変わってしまう」と話しているのを聞いて私はドキッとしました。今まで自分の緊張だけで頭が一杯だったから、もしかして産婦さんはもっと緊張して不安になったかもしれない……。

それからはできるだけ明るい雰囲気作りに心がけました。夫立ち合い分娩では、明るくなじみやすい雰囲気作りは欠かせませんでした。夫にも十分説明して、何ができるか理解してもらうことで、産婦さんの不安も軽減していくことが見てとれたからです。また、お産の時に好きな音楽をかけることも、雰囲気をやわらげたり、機材や吸引の音をやわらげるという効果があります。学生の一言から、緊迫している時こそ、ポーカークフェイスとバックミュージック、暖かい笑顔と十分な説明が効果的であることを学びました。

おわりに

2年間という短い期間でしたが、様々なことに出会い、考えることができたように思います。こんな私を指導して下さったスタッフの皆様には感謝の気持ちで一杯です。本当にありがとうございました。臨床の現場からは離れますが、周りの人々へ保健指導をしたり、母子のための音楽をいつか作っていきたくて思っています。その一歩として、新たな気持ちで自分を見つめ、自分の音をつくり、表現できるように努力していきます。

次のりれ一随筆は、看護学生の頃に母性看護を教えていただいた江崎先生です。先生は2人のお子さんを育てながら、福岡の病院で活躍なさっていらっしやいます。先生の考え方や生き方が、私は大好きです。先生、どうぞよろしくお願い致します。